

目次

序

第一章	個人的娯楽としての社会学	7
第二章	意識の一形態としての社会学	41
第三章	補論―態度変更と生活史	81
第四章	社会の中の人間	99
第五章	人間の中の社会	137
第六章	ドラマとしての社会	179
第七章	社会学的マキアヴェリズムと倫理	221
第八章	ヒューマニスティックな学問としての社会学	241
文献解題		259
訳者あとがき		

259	241	221	179	137	99	81	41	7	3
-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	---	---

序

この本を書いた目的は読者に読んでもらうことにあり、研究してもらうことにあるわけではない。また教科書として書いたつもりはないし、理論体系の構築を試みたわけでもない。この本はある知的世界への、私の考えではきわめて刺激的でありかつ有意義であると思われる知的世界への招待状である。このような招待状を送るに先立って、読者がこれから案内される世界がどのような場所であるのかをあらかじめ教えておく必要があるだろう。しかしもし読者がこの招待に真剣に感じようとするなら、この本を乗り越えてはるか彼方へと進んで行く必要があるだろう。

表現をかえるならば、何らかの理由で社会学に対して疑問を持ったり、問題を提起するようになった人々に、私は語りかけたいと思う。そのような人々の中には、社会学を真剣に取り上げるといふことを観念の上でしか考えない学生もいれば、彼らよりは成熟して「教育ある公衆」と呼ばれる、いささか神話的な存在の一人となっていている者もいるだろう。またこの本には社会学者にとって未知の事はほとんど書かれていない筈のだが、それでもこの本に引き寄せられる社会学者が出てくるかもしれない。というのも、われわれは自分たちの写っている写真を見る時には、一種のナルシスティックな